

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第43号

発行日 2016年4月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2016年度 差別の歴史を考える連続講座

- 第1回 6月17日（金） 四条河原の「芝居地」  
— 鴨川の治水と民衆の娯楽 —  
講師：下坂 守さん（日本中世史研究者）
- 第2回 7月1日（金） 犬追物と河原者の活躍  
講師：源城 政好さん  
（立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員）
- 第3回 7月15日（金） 近世京都の産科史料にみる医療とジェンダー  
講師：鈴木 則子さん  
（奈良女子大学生生活環境学部教授）
- 第4回 10月7日（金） 洛北岩倉と精神医療  
講師：中村 治さん（大阪府立大学人間社会学部教授）
- 第5回 10月21日（金） 近世・近代の京都の清掃の仕事  
講師：山崎 達雄さん  
（ごみ文化歴史研究会・日本下水文化研究会会員）
- 第6回 11月11日（金） 1928年、昭和天皇の京都での  
即位の「大典」と朝鮮人  
— 朝鮮人土木労働者の利用と排除を中心として —  
講師：塚崎 昌之さん  
（佛教大学・大阪大谷大学非常勤講師）

\* \* \* \* \*

時間：午後6時30分～午後8時30分 場所：京都府部落解放センター3階 第2会議室  
参加費：無料 ～参加ご希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

## 本の紹介

デイヴィッド・ライト著・大谷誠訳

## 『ダウン症の歴史』

中野智世

(成城大学教授)

本書は、著者ライト氏の幼少期のエピソードから始まる。一九六七年、生まれたばかりの妹スーザンさんが「蒙古症」——現在の「ダウン症候群」（以下、「ダウン症」と表記）——と診断されたとき、二歳だったライト氏は、二人の兄とともに、「長い注射針」で「腹部」から「血液サンプル」を採取されるといふ出来事を経験した。近親者の遺伝子マーカーを調べるためであった。その後も、ライト氏は、知能検査や質問調査を受けたり、ダウン症のある子どもの兄弟が「正常」であることを示すサンプルとして、大学の「異常心理学」の授業で学生の前に立たされるなどの「研究」に巻き込まれ、それは氏の幼年期の鮮明な記憶となっているという。

こうした家族への「科学の侵入」に対し、やがて、母のジーンさんは、こどもたちが「科学研究」の

対象にされることを拒絶するようになった。一九六〇年代当時としては例外的に、ライト氏の両親は、スーザンさんを施設に入れるのではなく、「他の兄弟と同じように」家で育てていた。それは、当時の医師や教育専門家の見解、助言に反することであり、珍しいだけでなく「勇気ある」決断であった。両親はその後も、スーザンさんが幼稚園や学校に入りたいと——普通の子供と同じように——願うたびに、闘いを余儀なくされた。そうした長い年月を経て、スーザンさんは地元の間企業で働くという夢を実現し、スペシャル・オリリンピックスの水泳で入賞し、州知事や首相と会見するなど、一九七〇年代のノーマライゼーション運動のシンボルの存在となった。二代で一〇歳年上の発達障害のある男性と結婚した彼女は、両親から独立してアパートを借り、現在

も夫とともに「支援された自立生活」をおくっているとのことである。

こうした家族の経験に導かれて、ライト氏は、医学史、そして障害史の研究者となり、現在はカナダのマギル大学の歴史学教授として研究・教育に従事している。本書は氏が、一般の読者を対象に平易にダウン症の歴史を語ったものである。二〇一三年には、イギリス科学史学会が優れた一般向けの著作に贈る「ディングル賞」を受賞し、その後、関係者の尽力によって、英語圏以外での最初の翻訳書として日本語版の出版が実現した。本欄では、ライト氏の思いに沿って、本書の内容を日本の読者にとつてなるべくわかりやすい形で紹介するとともに、若干の考察を試みたいと思う。

なお、過去の歴史を扱う本書においては、現在では使用されない差別的用語——「白痴」、「狂人」、「蒙古症」、「精神薄弱」など——がそのまま用いられている。ライト氏および翻訳者の大谷氏が断っているように、これら歴史的用語を用いるのは、障害のある人びとが過去どのように扱われてきたのかを忠実に再現するためであ

り、決して差別を助長する目的ではない。同じことは、小欄にも当てはまることを御了承願いたい。

さて、まずは本書の概要を簡単に紹介しておこう。本書の構成は以下の通り。

プロローグ

第一章 哲学者がみた白痴

第二章 私たちの中の蒙古人

第三章 猿線

第四章 21トリソミー

第五章 一般の社会の中へ

エピローグ ダウン症の未来

氏の個人的経験から筆を起し、本書の構成・ねらいを語る導入部分——プロローグに続いて、第一章から第五章までの本論は、欧米を中心に（日本に関する叙述も一部含む）、中世から現代までのダウン症の歴史を時代順に辿っていく構成となっている。以下では、各章ごとにその内容を概観していこう。

第一章は、ダウン症が固有の症状として認識される以前、いわばダウン症の前史を扱っている。古くは中世から、自身の行いや物事を管理できない人びとに対しては様々な法的定義やカテゴリー化が試みられていた。例えば、一六世紀イングランドの法的文書は、「二〇まで数字を数えられず、何

歳であるのかを言えず、父親が誰であるのか分からない者」を「天然の（生まれながらの）馬鹿」、「白痴」とし、その財産管理を国王に委ねている。また、一七世紀の刑法学者は、理性を奪われた「白痴」と「狂人」は、善と悪との区別がつかないため、刑事訴追から免除されるとした。

一八世紀の啓蒙期を迎えると、これらの人びとに医学が関心を向けるようになる。人間の進歩と改善を信じる啓蒙主義思想の下、医師たちは、「白痴児」や「聾啞児」など、これまでは治療不能で改善の見込みがないとされてきた人びとに対する治療と教育に取り組みはじめた。一九世紀には、現在の手話や点字の原型が編み出され、『アヴァロンの野生児』——森で育った「野蛮人」の少年を療育したという医師イタールの著書——が評判となったのもこの頃である。一八四二年には、フランスの医師セガンが『白痴児と遅滞児の教育理論とその実践』をあらわし、その後、ヨーロッパと北米の各地において、障害児の教育を目的とした施設が設立されるようになった。

第二章では、「ダウン症」の語源ともなった医師、ジョン・ラン

グドン・ダウン（一八二八〜一八九六）がとりあげられる。イングランの「白痴保護院」院長であったダウンは、一八六六年、ある特別な身体的特徴をもつ「白痴」の子どもたちに着目し、彼らを「蒙古人種」であるとした。その、「顔は平べったく、幅広く・・・頬は丸みを帯び、外側に広がっている。目は斜めであり、各々の内眼角が通常よりも離れている」といった外見を有する子どもたちを、ダウンは「人類のより原始的な種族」へ、すなわち白色人種から原始人種へと逆戻りしている存在とみなしたのである。

現在の目から見れば、ダウンの人種主義的見解を批判するのは容易である。しかし、時はダーウィンの進化論が人類学に大きな衝撃を与え（『種の起源』は一八五九年に刊行）、アメリカでは（黒人）奴隷制を争点とする南北戦争のただ中であつた。こうした時代状況のなかで生まれたダウンの理論は、当時から多くの専門家によって批判されたものの、「蒙古症」という言葉はひとつの症例カテゴリーを示すものとして生き残っていくこととなる。

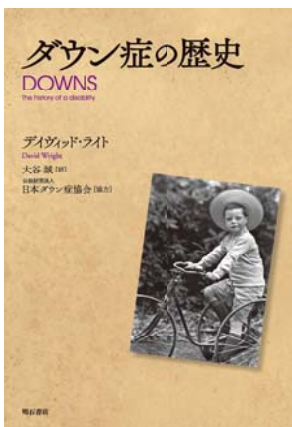
二〇世紀初頭になると、「蒙古

症」という病気についての意見はなおまとまらないまま、その原因を両親の結核や飲酒癖、梅毒などに求める議論が盛んになった。その背景には、当時、強力なイデオロギーおよび社会運動として誕生した優生学の影響がある。遺伝学者、精神医学者たちは、障害をもつ人びとの存在を「人種的退化」という脅威とみなしはじめていた。

続く第三章の冒頭に登場するのは、ダウンの息子の一人、レジナルドである。父と同じく医師となったレジナルドは一九〇五年、蒙古症の人びとの手のひらを横切る一本のしわを発見し、それを「猿線」と名付けた。そこから、蒙古症は当時の優生学的議論に飲み込まれていく。医師や教育者のあいだでは、精神欠陥が遺伝的に受け継がれることを社会的悪徳とする見解が広がり、蒙古症の人びとも、遺伝的「不適格」者としてその排除が求められるようになっていった。折しも西洋諸国では義務教育制度が確立しつつあり、すべての子どもが初等学校に通うようになるなかで、学業についていけない「白痴児」、「痴愚児」が社会的にも大きな問題として認識されはじめていた。「教育可能な子」とそう

でない子を区別するために、知能検査や心理テストが考案され、「教育不可能」とされた児童は「精神薄弱」として、特殊学級の分離教育や施設への隔離、そして後には、断種の対象とみなされるようになっていく。

二〇世紀の初め、北米を皮切りに、ヨーロッパ各地の州や地域レベルで実施されるようになった断種政策が、もつとも急進化した形で現れたのは、ナチ体制下のドイツにおいてである。一九三三年、ナチの政権獲得後すぐに制定された遺伝病根絶法（断種法）は、精神疾患や障害のある人びとに対する強制断種を許可した。一九三九年までに、三十六万人に断種が実行されたという。また、一九三九年に始まったT-4作戦、いわゆる「安楽死」政策は、医師の判断による障害のある子どもの殺戮を許可するものであった。当初は致死



注射が、後にはガスによる殺害が行われ、その犠牲者数は七〇九万にのぼったと言われる。ダウン症の歴史において、史上最も暗黒の、最も残虐な時代であった。

第四章では、ダウン症がそれまでの人種にかかわる憶測を離れ、染色体異常を原因とすることが突き止められた時代を扱う。フランスの内科医ルジュューヌは、一九五〇年代半ばに「蒙古症児」の細胞遺伝研究を始め、この子どもたちには染色体が一本余分に存在していることを発見した。この「21トリソミー」と呼ばれる二一番染色体の発見により、ダウン症は他の知的障害とは全く別の病気として切り離されることとなった。蒙古症という言葉はもはや使われなくなり、フランス語圏では「21トリソミー」が、そして、英語圏やその他の国々では「ダウンの異常」、「ダウンの症候群」、そして「ダウン症」という言葉が次第に使用されるようになっていく。

な処遇——慢性的過密や不衛生な状態、スタッフによる入居者への身体的・性的虐待——が暴露され、脱施設化とコミュニティ・ケア（地域におけるケア）への移行が促された。一九七〇年代には、グループホームが地域におけるケアの有力なモデルとなり、障害のある人びとが、様々な支援やサービスを受けながら地域社会で自立して生活することが目指された。

第五章では、ダウン症のある人びとに関する議論が、医師や教育者といった専門家集団を離れ、広く一般社会の中で議論されるようになった現代までを扱う。ノーマライゼーション運動のなかで重要な役割を果たした障害児の「親の会」は、何十年にも及んだ隔離教育に対して障害のある子どもの普通教育への統合を求め、一九八〇年代までに多くの西洋諸国で勝利を収めた。

障害者の権利拡大や社会への包摂が劇的に進展したこの時代、しかし、科学の進歩はあらたな倫理的問題を生みだしつつあった。妊婦の羊水検査によって、出産前の胎児におけるダウン症の識別が可能となったのである。これはまた、欧米各国で選択的中絶が合法化さ

れる時代とも軌を一にしていた。出生前診断が一般に普及するなかで、ダウン症の子どもを産むか否かは、今や個々の両親の選択に委ねられることになった。「静かな優生学」の時代と称される所以である。最後に、ダウン症およびダウン症のある人びとをめぐる現今の課題を指摘しつつ、本書は閉じられる。

まず、本書の特徴として以下の二点を指摘しておきたい。まずひとつには、本書がダウン症の「医学史」——すなわち、ながらく未解明だった症例の医学的解明という科学史——と、ダウン症のある人びとがどのような状況におかれていたか、といったダウン症の「社会史」の両方を視野におさめている点である。いわゆる科学史のサクセス・ストーリーのなかでは、ダウン症のある人びとは、ともすれば、単なる「症例」として、顔の見えない「障害者」という集団の中に埋もれてしまいかねない。それに対し、ライト氏は、ダウン症のある人びと一人一人を妹のスーザンさんと同じような人間として、彼らの経験した受容と排除の両面を描くことに力を置いている。それぞれの時代の新しい医学的発見

あるいは革新的実践が、ダウン症のある人びとの現実にとどのような影響を及ぼしたのかという視点を失うことがないのである。

もうひとつの本書の特徴は、歴史家らしい冷静さと緻密さを備えた叙述・分析スタイルである。ダウン症の歴史は、当事者からみれば、長きにわたる差別と無関心、分離と排除、あげくのはてには優生学の名の下での抹殺といった社会的抑圧の歴史でもある。ライト氏の家族の「闘いの歴史」からすれば、スーザンさんの分離教育と隔離を自明としていた当時の医師や教育専門家を非難し、「研究サンプル」としてライト氏自身をも巻き込んだ近代科学の「野蠻」を糾弾してもおかしくはない。しかしライト氏は、そのように過去の事象を一方的に断罪することはない。それが現在の眼からみて「良い発見」であれ、「悪しき実践」であれ、ダウンをはじめとする専門家たちがどのようにこの問題に取り組んできたのかを、あくまでそれぞれの時代の政治、文化、社会的文脈に即して冷静に分析し、理解しようとする。現代的視点からすれば到底許容しえないような思想や政策——断種政策や「安

「楽死」作戦はその極みである——  
 が、なぜ当時は「より良き社会」を生みだすものとして構想されたのか、そして、なぜ当時の人びとはそれを受け入れたのか、こうした問いは、当時の文脈を踏まえてはじめて理解可能である。そして、そこまで理解を深めることによつてのみ、私たちは、「過去の惨事」を現代に生きる自身の問題として捉えなおすことができるのである。医学史家であると同時に当事者の家族でもあるライト氏の本領は、こうした点にもいかに発揮されているといえよう。この本が、他ならぬスーザンさんに捧げられていることもうなずける。

訳者である大谷氏はイギリスの障害史を専門とし、ライト氏が本書の執筆を準備している頃から、日本に関する調査や情報提供などを通して本書の原案作成に関わった協力者である。その意味で、この日本語版は、いわば理想的ともいえる訳者を得たことに加え、日本ダウン症協会の協力もあって、読者のための様々な工夫が施されている。巻末には著者による用語集が配され、さらに知識を深めた読者に対しては、英語圏の文献紹介に加えて大谷氏による日本の

研究状況についての紹介も付されており、大変有益である。

訳者あとがきにもあるように、現代の日本では、ダウン症に関する関心が以前にまして高まりつつある。晩婚化を背景に、ダウン症のある赤ちゃんは数多く生まれるようになり、ダウン症のある人びとの社会への統合も進みつつある。その一方で、出生前診断が容易になり、ダウン症のある子どもは誕生は抑制され続けるという悩ましい状況がある。何がより良き選択なのか、容易に答えはみつからない。こうした時に、本書のような著作が世に出たことの意義は大きい。

ライト氏によれば、歴史研究が示すものは「未来への教訓や行程表」ではなく「謙虚さと慎重さ」であり、現代の私たちがダウン症をどのように理解するのか、その手助けをするものであるという。一人ひとりが問題を根本から問い直すために、あらためて謙虚に歴史を振り返ってみてはどうだろうか。広く一読を薦めたい一冊である。

（明石書店刊、二〇一五年二月、三八〇〇円）

## 本の紹介

塚本明著

### 『近世伊勢神宮領の触穢観念と被差別民』

奥本武裕

（奈良県立同和問題関係史料センター所長）

部落問題に関する啓発冊子やホームページなどで、部落差別の「起源」について「ケガレ」意識から説明するものを読む時、違和感を感じざるをえない記述に出会うことがある。具体的な事例を挙げることはひかえるが、「『ケガレ』を『キヨメ』る役割を担った（強制された）人びとが、逆に『ケガレ』ているとされたことが部落差別の始まりだ」とするような記述である。

啓発資料という制約があり仕方のない部分もあるかもしれないが、このような説明の仕方はあまりにも単純ではないか。一方で、周到に準備され作成されたことをうかがわせる啓発資料も存在するだけに、「もう少し何とかならなかったのか」という思いがする。

日本社会において歴史的に形成され、一定の変容を経つつもいまもなお存在する「ケガレ」に関する観念が、部落差別や女性差別等々

の様々な差別と深く関わっていることは間違いないのだが、「『ケガレ』た存在として差別を受けた」というようなあまりにも単純化された説明が、果たして妥当だといえるだろうか。

「ケガレ」観念と部落問題に関する研究状況については、吉田勉氏の「身分論から差別論・穢れ論・境界論・地域社会論へ——歴史学・民俗学・人類学・宗教学などの成果」（『部落解放研究』第二〇〇号、二〇一四年）を参照されたいが、民俗学や文化人類学の議論を部落問題に関する議論に性急に持ち込むことの困難さを痛感せざるを得ない。

なお、吉田氏の整理では触れられていないが、中世史分野における「ケガレ」観念研究の端緒となった横井清氏の「中世の触穢思想——民衆史からみた——」（同『中世民衆の生活文化』東京大学出版会、一九七五年、所収）における「ケガレ」観

念理解に対する池見澄隆氏による批判（『中世の精神世界―死と救済―』人文書院、一九八五年）は重要な論点を提起するものだと考えている。池見氏は、神祇信仰（神道）における「触穢」観念と、仏教における「不浄」に関わる観念、浄土教の「穢土」「穢身」に関わる観念は峻別して考えるべきだと提起しているのだが、池見氏の提起は、その後の研究史のなかで、ほとんどそのまま放置されてきたのではなかっただろうか。

古代、中世の「ケガレ」観念については、近年、議論が再度活性化しうる状況が生まれており今後の深化に期待したいが、歴史研究において求められるのは、民俗学や文化人類学の議論の性急な援用ではなく、各地域における「ケガレ」観念をめぐる種々の様相について、地域特性を考慮しながら残された史料にもとづいた、いわばボトムアップな議論を積み重ねていくことだと考えている。

こうした状況のなか、二〇年以内にわたって三重県域をフィールドに古文書調査を重ね、三重県内の自治体史編纂等にたずさわるなど、三重県域の地域史研究に大きな成果をあげてこられた塚本明氏

によって伊勢神宮領という近世の日本社会のなかでも特異な性格を有した地域における触穢観念の展開と被差別民と社会の関係を追求した著書『近世伊勢神宮領の触穢観念と被差別民』が刊行された。このような研究は、近世史分野においては希有なものであり、今後の議論の起点となるものだとはいえるだろう。

さて、通例にしたがって本書の構成を示せば次のとおりである。

序章	触穢とその忌避
第一章	死穢の判定
第二章	速懸―近世神宮領における葬送儀礼
第三章	犬狩―動物の穢れと生類憐れみ
第四章	仏教の受容と忌避
第五章	神宮領と被差別民
第六章	被差別民の参宮とその影響
第七章	拜田・牛谷の民―近世宇治・山田の非人集団
第八章	内宮周辺農村の被差別民
第九章	神宮直轄領の被差別民
第十章	神宮領の鳴物停止令

終章	幕末異国人情報と伊勢神宮
附編	『神宮編年記』触穢関係記事一覧

第一部では、近世の伊勢神宮領における触穢観念の認識、解釈や運用について、第二部では、触穢観念との関連から神宮領における被差別民の存在様態について、第三部では、朝廷や幕府が発した触穢令などと神宮領の触穢観念の関係について、それぞれ論じられていく。各章の概要については、著者自身によって「序章」と「終章」に整理されており、また、茂木陽一氏による書評でも適切な紹介がなされている（『部落問題研究』第二一五輯、二〇一六年）ので、それらをご参照いただきたいが、ここでは筆者の関心から興味深かった論点について紹介しておきたい。

「ケガレ」観念のありようについては、本書を通じた分析から、塚本氏は近世の伊勢神宮領における「ケガレ」は一定の時間の経過によってのみ消滅する状態だと理解されていたとし、祓や清めによって解消されるものではないと観念されていたと結論づけている。そうしたなかで、近世の伊勢神宮領においては中世以来の触穢規定が建前としては、極めて厳密に遵守されるとともに、地域住民の生活や来訪者の参宮などに支障を来さないような解釈・運用が行われていた。その代表的なものが「速懸」の習俗である（二章）。神宮領で死者があつた場合、それを「病氣大切」すなわち未だ死には至っていない状態だとしうえで、墓地において死んだことにし埋葬を行うというものだが、この「速懸」は神宮領における死穢が死によって即時に生じるといふような厳密な解釈がなされてはおらず、避け難い死穢をその場においては生じなかつたことにするといふ極めて融通無碍な解釈がなされていたことがわかるのだが、一方で「速懸」の一般化により死穢を忌避するという意識は強化され、土掛け役を担うこととなった神宮領の「非人」集団が、常に「触穢」が更新される存在として強い忌避意識にさらされることになったと結論づけている。

差別民が恒常的に「触穢」が更新される存在だと観念されるのも同時期以降のこととされている。

また、内宮周辺地域社会の「穢多」村（朝熊村枝郷垣外）については四万点を超える朝熊町有文書の中から詳細な検討がなされており、その存在様態や周辺地域社会との関係が明らかにされている（七章）。そこから得られた結論は、当該「穢多」村は伊勢神宮が存在することによる固有の役割を担っており、神宮領であるがゆえに不可欠な存在であった訳ではない（二二二頁）ということである。このことについて茂木陽一氏は前掲書評で、「神宮領の論理とは異なる場所から移植されてきた存在なのではないか」「どのような経緯でどこから、そしてそれはいつ頃なのかを明らかにする課題」が存在するとしているが、必ずしも「異なる場所から移植」などという論理を持ち出さなくても、塚本氏が「宇治・山田の地域社会と日常的に濃厚な交流があり、その活動のなかに「一定の宗教性を見出せるかもしれない」と述べるように、伊勢神宮の存在とは関係なく地域社会の存立に不可欠な存在としての「穢多」村という歴史像を描くことが可能なのではないだ

ろうか。

なお、茂木氏の書評については塚本氏から詳細なリプライがなされ、陽一氏の批評を受けて、『部落問題研究』第二五輯、二〇一六年）、併読されることをおすすめする。

さらに、犬狩の習俗（三章）については、中世の奈良においても被差別民がその役割を担っており、神宮領では犬による穢れの発生の忌避、奈良では神鹿保護のためとその目的が異なることや、奈良では江戸時代になると犬の足の躄を切って追い払うという方法に変化していくことなど、単純な比較はできないが興味深い論点には違いないだろう。

「ケガレ」観念を歴史的に分析することは史料の残存状況などに規定され困難なことが多く、希少な事例の性急な一般化や、民俗学や文化人類学の議論、他地域における事例の安易な援用をもたらしてしまうがちなのだが、本書は神宮領における死穢を中心とした触穢規定とその解釈・運用、そこにおける被差別民の役割に課題を限定し、塚本氏が長年にわたって調査収集した膨大な史料の分析によって議論を組み立てることで、その

ような陥穽におちいることを免れており、その議論からは学ぶことが多かった。中世や近代にまで射程を広げた当該地域におけるさらなる議論の深化が望まれるとともに、本書の水準に劣らない他地域における研究の進展が求められるだろう。

そのような本書の意義を十分に評価したうえでのことなのだが、「ケガレ」観念を「触穢」観念とその忌避習俗に限定して論じるという視座が、被差別民が果たしてきた祭礼や芸能興業の警護役などの役割について「一定の宗教性を見出せるかもしれない」という曖昧な評価にとどまらざるを得ないという結果を生んでしまっているように思われる。

それは、塚本氏の禁欲的な姿勢によるものだろうが、具体的に発生した（と観念される）触穢に対する忌避習俗における被差別民の役割に限定し、しかも時間の経過によつてしか触穢は解消せず、祓や清めによつて解消されることはなれないという枠組みのなかでは、被差別民は忌避すべき触穢を集中的に引き受けさせられる——つまりところは「人の嫌がる役割（仕事）」を押しつけられた存在という、本稿冒頭で触れたような啓発資料に

散見されるものと大差ない理解にとどまってしまうのではないだろうか。

祭礼や芸能興業の警護役を持つ「一定の宗教性」をいかに捕捉するか——「ケガレ」論の一層の深化と、「ケガレ」の除去や忌避に關して被差別民が担ってきた役割についての具体的な事例に則した精密な分析が必要だと考えている。

なお、最後に個人的な感慨を述べたことを許していただきたいが、本書の「あとがき」に記された塚本氏の学生時代の京都における体験については、同年生まれで同期に京都で学生生活を送った筆者にとって、学んだ大学も異なり、塚本氏と出会うこともなかったが、共感するところが多かった。ただ、塚本氏と筆者で大きく異なるのは、その後のことであり、塚本氏が三重県域で行われたような地道な史料調査や丁寧な議論を自分自身でできたのかと自問するとき、忸怩たるものがある。遅まきながら奈良県域における史料調査や研究に腰をすえて取り組んでいきたいと考えている。

（清文堂出版、二〇一四年三月、九五〇〇円）

開催される 友永健三

回顧 教科書無償運動 16 教科書無償制度の実現 村越良子, 吉田文茂

**部落解放 724** (解放出版社刊, 2016. 4) : 600円

特集 水俣病差別の60年

映像フリースペース 小林茂監督「風の波紋」 確固たる意志によって作られた心優しくおおらかで美しい記録映画 白井佳夫

ヘイト・スピーチを受けない権利 10 部落差別とヘイト・スピーチ 1 前田朗

本の紹介 沖浦和光著『部落史の先駆者・高橋貞樹 青春の光芒』 黒川伊織

水平社創立の思想を世界に 水平社博物館、日本初のFIH RM加盟 駒井忠之

回顧 教科書無償運動 17 連載を終えるにあたって (上) 村越良子, 吉田文茂

**部落解放研究 204** (部落解放・人権研究所刊, 2016. 3) : 2,000円

特集 1 普通選挙と部落問題

「普選と部落問題」研究特集にあたって 吉田文茂／帝国議会と融和问题研究会—1920年代における融和運動と普選体制— 本郷浩二／労働農民党の政策課題としての部落問題 吉田文茂／普通選挙と香川県水平社 山下隆章／松阪市議員としての上田音市—総力戦体制と部落問題 廣岡浄進／部落差別撤廃運動と政治参加—第二次大戦後初期の奈良県の動向を中心に— 井岡康時

特集 2 差別禁止法の制定に向けた論点整理

特集にあたって 内田博文／禁止規定の担保措置について規定するかどうか 金尚均／禁止規定の担保措置として刑罰を規定すべきか 櫻庭総

**部落解放研究 22** (広島部落解放研究所刊, 2016. 1) : 1,000円

この夏を忘れない—安保法制反対運動の展開と今後の展望 内田雅敏

「『両側から超える』部落解放運動をすすめるために」を考察する 政平智春

ディスアビリティと格闘する 秋風千恵

私たちの死生観に関する私考 長坂壽一

外国人労働者とコミュニティ・ユニオン—技能実習生の実態と広島における支援運動を中心に 崔博憲

在日高齢女性と社会的孤立—在日集住地域の通所介護施設を事例として 安錦珠

資料紹介 『関釜裁判ニュース』全号記録集—福岡から

「慰安婦」問題を見る 木下直子

**部落解放研究くまもと 71** (熊本県部落解放研究所刊, 2016. 3)

特集 全国水平社の戦争協力

全国水平社の戦争協力 朝治武

公式確認60年：なぜ水俣病が終わらないのか～差別と人権の課題として～ 花田昌宣

史料紹介 菊池郡かわた関係史料 阿南重幸, 橋口和孝, 山本尚友

**部落問題研究 215** (部落問題研究所刊, 2016. 3) : 1,058円

特集 書評をとおして考える—歴史編

書評 塚本明『近世伊勢神宮領の触穢観念と被差別民』 茂木陽一／三重の部落史再考—茂木陽一氏の批評を受けて 塚本明／「日用」層の社会的結合と地域—森下徹著『近世都市の労働社会』を読んで— 齊藤紘子／拙著『近世都市の労働社会』書評へのリプライ 森下徹／『新修彦根市史 第4巻 通史編 現代』を読む—現代の焚書坑儒を越えて刊行された注目の書— 広川禎秀

中世後期の葬送と清水坂非人・三昧聖 島津毅

史料紹介 近世隠岐島流人の利口書 (中) 松尾寿

**本願寺史料研究所報 50号** (本願寺史料研究所刊, 2015. 12)

本願寺の「袍衣納」について—広如・徳如の子どもから— 長瀬由美

**ライブラリー・リソース・ガイド 14** (アカデミック・リソース・ガイド刊, 2016. 2) : 2,500円

図書館は「利用者の秘密を守る」その原点と変遷—大学図書館データの利活用の可能性 岡部晋典

**リベラシオン 161** (福岡県人権研究所刊, 2016. 3) : 1,000円

特集 井元麟之資料目録

井元麟之資料目録解題—目録作成の経過と内容— 森山沾一, 塚本博和／井元麟之資料目録

文章を公表する責任と覚悟 朝治武

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 24 九州最初の解剖は福岡藩か? 石瀧豊美

図書紹介 友永健三著『部落解放を考える—差別の現在と解放への探求—』を推薦する 森山沾一

**和歌山研究所通信 51** (和歌山人権研究所刊, 2016. 1)

「秀吉の根来・雑賀攻め」の地を訪ねて—全国大学同和教育研究協議会フィールドワークより 1— 藤里晃



**ヒューマンライツ 336** (部落解放・人権研究所刊, 2016.3) : 500円

特集 3.11を忘れない

調査結果からみる部落問題のいま 1 兵庫県の「人権に関する県民意識調査」からみえるもの 橋本貴美男

各地の人権研究所の取り組み 10 人権文化の創造をめざして 世界人権問題研究センター 安藤仁介, 杉木志帆  
わたしの視点—メディアの現場から 7 「人権は怖い」考—東西の違いから考える 鈴木英生

書評 おとなの学び研究会編『「ことば・表現・差別」再考』 森実

走りながら考える 175 全国水平社創立100年を展望する 3—情報の視点で部落解放運動の再構築を— 北口末広

**ヒューリアみえ研究紀要 1** (反差別人権研究所みえ刊, 2013.3)

三重県内高校生等の部落問題に関するアンケート調査から見えてきたもの 原田朋記

三重県内の土地差別問題の現状と課題 松村元樹

SRと人権—ISO26000をどう活用するか 本江優子

災害と人権—障がい者を取り巻く現状と課題— 川本伸司

**ヒューリアみえ研究紀要 2** (反差別人権研究所みえ刊, 2014.3)

人権問題に関する三重県民意識調査—同和問題と他の人権課題等とのクロス集計から見えてきたもの— 大谷徹  
伊賀市中学生「インターネット及びアプリケーション利用と生活に関する状況調査」から見えてきたもの 中村尚生

SR (Social Responsibility=社会的責任) と人権—持続可能な地域づくり— 本江優子

災害と人権—「防災・減災に向けた地域社会との豊かな関係の構築をめざすアンケート調査」から見えてきたもの— 松村元樹

**ヒューリアみえ研究紀要 3** (反差別人権研究所みえ刊, 2015.3)

津市内中学3年生保護者の人権問題に関するアンケート調査の結果から見えてきたもの 原田朋記

SR (Social Responsibility=社会的責任) と人権—消費者の社会的責任と消費者教育— 本江優子

貧困問題解決に向けた調査・研究—伊賀市の各種調査結果から— 松村元樹

**佛教大学大学院紀要 社会学研究科篇 44号** (佛教大学大学院刊, 2016.3)

「文化」をベースとする「よそ者」のまちづくり—京都市S同和地区で活動するI氏の語りを中心に— 中川理季

**部落解放 720** (解放出版社刊, 2016.1) : 1,080円  
第46回部落解放・人権夏期講座報告書

**部落解放 721** (解放出版社刊, 2016.2) : 600円  
特集 『和歌山の部落史』 完結!

ごあいさつ 菌田香融 / 『和歌山の部落史』 完成によせて 池田清郎 / 『和歌山の部落史』 ができるまで 矢野治世美 / 『和歌山の部落史』 編纂から見えてきたこと 近世を中心として 寺木伸明 / 和歌山から見る部落史 『和歌山の部落史—通史編』 を読む 小田康徳 聞き手 矢野治世美

忘れてはならない自主解放 住吉隣保事業推進センターの建設にむけて 友永健三

人としての温かさと運動には夢があった 山本義彦さんを追悼する 野口道彦

回顧 教科書無償運動 15 1962年以降の運動 村越良子, 吉田文茂

**部落解放 722** (解放出版社刊, 2016.2) 1,000円  
部落解放研究第49回全国集会報告書

**部落解放 723** (解放出版社刊, 2016.3) : 600円  
特集 被差別カーストの苦悩と挑戦

特集にあたって 廣岡浄進 / 食肉に携わる人びととカースト ネパール・カドギたちの60年 中川加奈子 / 留保のあとに 「不可触民」 エリートたちの道 舟橋健太 / インドのダリト経営者と商工会議所 篠田隆

本の紹介

『現代インドに生きる<改宗仏教徒>—新たなアイデンティティを求める「不可触民」』 舟橋健太著 / 『インド農村の家畜経済 長期変動分析—グジャラート州調査村の家畜飼養と農業経営』 篠田隆著 / 『ネパールでカーストを生きぬく—供犠と肉売りを担う人びとの民族誌』 中川加奈子著 / 『Marginalization in the Midst of Modernization—A Study of Sweepers in Western India, New Delhi』 Shinoda, Takashi

本の紹介 鈴木真弥著『現代インドのカーストと不可触民 都市下層民のエスノグラフィ』 増木優衣

ダリットと部落の国際連帯 これまでの15年とこれから 小森恵

DVD『シリーズ映像でみる人権の歴史』を活用して、部落問題学習をやってみよう! 木村直人

水平社・衡平社創立100周年に向けてさらなる連帯を 衡平運動をテーマに、新たな広がりを見せた国際学術大会

障がいのある人への虐待はなぜ起こるのだろうか 荒川哲郎

三重県における高齢者虐待の実態と高齢者虐待防止法の課題—ホームヘルパーを対象としたアンケートの結果を踏まえて— 鶴沼憲晴

研修生制度と労働力の国際化—人権意識の啓発に関する考察— 常清秀

現代社会とことば—言語生活研究の歩み— 南不二男  
「水平社宣言」に学ぶ 池田徹

**反差別人権研究みえ 7** (反差別人権研究所みえ刊, 2008.6)

平和基本法の新展開に向けて 児玉克哉, 前田哲男, 飯島滋明, 吉岡達也

不登校児童・生徒の「心育ち」のキーステーション—適応指導教室における教育実践— 向出佳司

「インターネット」から見える社会矛盾 山本藤雄  
三重県における男女共同参画施策の検討 柴田啓文

**反差別人権研究みえ 8** (反差別人権研究所みえ刊, 2009.5)

三重県における特別支援教育の現状と子どもの人権課題 荒川哲郎

水平社創立の精神に学ぶ～勤るかの如き運動から人間を解放せんとする運動へ～ 訓覇浩

被差別部落の生活と就労～2006年度伊賀市生活実態調査より～ 長谷川健二

人権のまちづくりの考え方とその課題について—近年の三重県人権・同和教育研究大会報告から— 宮城洋一郎  
ホテル業における「労働力の組織化モデル」に関する理論的考察 金蘭正

**反差別人権研究みえ 9** (反差別人権研究所みえ刊, 2010.3)

希望開発としての平和学 児玉克哉

データから見た地球の温暖化とその影響 谷山鉄郎, 持地信雄, 大竹和美

“グローバル化社会”下の人権問題 常清秀

女性留学生から見た日本の姿 柴田啓文

インターネット上に生じるあらゆる問題について考える 山本藤雄

皮革の流通—難船史料にみる江戸積皮革と同関連荷物 上田武司

**反差別人権研究みえ 10** (反差別人権研究所みえ刊, 2011.3)

被差別部落の生活と就労～2006年度「桑名市生活実態調

査」を中心として～ 長谷川健二

「親と子の絆」再生の実践レポート 家族崩壊寸前のファミリーサポート～“親子の愛”という“心の基地”を求めて～ 向出佳司

ハンセン病問題について考える 小鹿美佐雄

多文化共生社会の実現のための課題 金蘭正

皮革の流通—田辺関連史料にみる大坂渡邊村と紀州田辺の取引 上田武司

**反差別人権研究みえ 11** (反差別人権研究所みえ刊, 2012.3)

国際平和研究会の展開と人権研究 児玉克哉

モニタリングを通して～インターネットを通じた差別問題～ 松村元樹

桑名における人権のまちづくり そのあゆみと課題 宮城洋一郎

差別禁止から新たな社会づくりへ 荒川哲郎

**ヒストリア 253号** (大阪歴史学会刊, 2015.12)

書評 杉本弘幸著『近代日本の都市社会政策とマイノリティー—歴史都市の社会史—』 佐々木拓哉

**ヒューマンJournal 215** (自由同和会中央本部刊, 2015.12) : 500円

部落解放運動四十年を振り返って 18 人権教育における啓蒙主義 灘本昌久

**ヒューマンJournal 216** (自由同和会中央本部刊, 2016.3) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 19 「隠す」こと、「逃げる」こと 灘本昌久

**ひゅーまんらいと 360** (部落解放・人権政策確立要求京都府実行委員会刊, 2016.2)

京都人権文化講座 「同対審答申50年と被差別部落のいま」 妻木進吾

**ヒューマンライツ 334** (部落解放・人権研究所刊, 2016.1) : 500円

特集 介護と虐待—介護の現場で何が起きているのか 各地の人権研究所の取り組み 9 部落問題・部落史の情報発信センターとして 京都部落問題研究資料センター 走りながら考える 173 全国水平社創立100年を展望する—2022年問題を克服するために— 北口末広

**ヒューマンライツ 335** (部落解放・人権研究所刊, 2016.2) : 500円

特集 欠格条項から“法制度に残る差別”を考える 走りながら考える 174 全国水平社創立100年を展望する 2—サイバー (電子) 部落解放運動の構築を— 北口末広

2014年度人権週間ギャラリー展シンポジウム 誠信交隣を願って一日朝・日韓関係の歴史と現在— 仲尾宏, 水野直樹, 文公輝, 山内小夜子／朝鮮学校襲撃事件と、その判決が意味するもの 上瀧浩子／沖縄と米軍基地—差別としての基地集中— 前泊博盛／演劇『太平洋食堂』上演の今日的意義—真宗大谷派の近現代史への学びとともに— 戸次公正／浄土教と憲法 菱木政晴

全国水平社創立宣言の世界的意義を再確認しよう！！  
朝治武

「是梅陀羅」問題から問われる教団のこれから 阪本仁  
『観経』序分「是梅陀羅」を通して見る仏教者の差別意識 伊藤修

**月刊スティグマ 236** (千葉県人権センター刊, 2016. 3) : 500円

部落地名総鑑を販売しようとする動きについて 鎌田行平

**月刊地域と人権 381** (全国地域人権運動総連合刊, 2016. 1)

特集 第11回地域人権問題全国研究集会 in 三重

**月刊地域と人権 382** (全国地域人権運動総連合刊, 2016. 2)

特集 第11回地域人権問題全国研究集会 in 三重

第5分科会

そもそも部落問題とは？ 西尾泰広／部落問題の過去と現在 丹波正史

**であい 646** (全国人権教育研究協議会刊, 2016. 1) : 160円

人権文化を拓く 218 ヘイトスピーチ条例と慰安婦問題 李信恵

**であい 647** (全国人権教育研究協議会刊, 2016. 2) : 160円

一茶の俳句—被差別民を描いた俳句— 市村護

人権文化を拓く 219 「十人十色」の共生へ～色覚差別の論理と心理～ 荒伸直

**であい 648** (全国人権教育研究協議会刊, 2016. 3) : 160円

信州の部落の歴史を取り戻す闘いの途上で～中世の善光寺、近代の部落学校、島崎藤村『破戒』などにふれながら～ 齋藤洋一

人権文化を拓く 220 競争と利益第一の経済が格差と貧困をもたらし、さらなる差別をもたらしている 山本健治

**同和教育論究 36** (同和教育振興会刊, 2015. 11) : 1,500円

00円

蓮如教団・教学における身分と業論 松尾一

中国における仏教の本質的变化と差別土壌の形成～業報思想をめぐる差別法話の背景～ 直海玄哲

原発と向き合う念仏者の歩み 井上慶永

覚書・近世本願寺教団における被差別寺院の新寺建立をめぐる 左右田昌幸

**同和教育論究 37** (同和教育振興会刊, 2015. 12) : 1,500円

仲尾孝誠理事追悼号

遺稿

あの人らは私らと違う／同朋運動における「同和」問題の位置／同朋運動学習の課題と原則—「同朋運動講座」覚書き—／宗教と人権—宗教は人間のためのものであるか—／差別解放は浄土教の悲願／部落解放を妨げるもの—同和でなく解放を—／宗教者の差別発言事件に学ぶ—浄土真宗本願寺派滋賀教区住職差別発言事件の取り組みから

仲尾孝誠年譜

追悼論文

親鸞著述における「われら」の用法と位置に関する基礎研究 齊藤真／真俗二諦論ノート 小笠原正仁／セクシャル・マイノリティと御同朋の教学 岩本智依／浄土真宗本願寺派における女性—「宗制」における「坊守」と「女布教使」 仲尾萌恵

追悼文

史料紹介 近世真宗差別問題史料 9—(仮称)「丹波国本明寺一件」関係史料と参考史料— 左右田昌幸

**奈良県立同和问题関係史料センター研究紀要 20** (奈良県立同和问题関係史料センター刊, 2016. 3)

中尾靖軒と森田節齋—幕末・明治初期、被差別部落出身青年の修学経験— 奥本武裕

奈良東山中の十九夜講 清水有紀

中世大和被差別民の呪術性考察—「盲目」を題材として— 山村雅史

筒井氏と西大寺 山川均

奈良盆地における環濠集落研究の成果と課題 穴田敏之

**日本歴史 814** (日本歴史学会編, 2016. 3)

書評と紹介

杉本弘幸著『近代日本の都市社会政策とマイノリティー歴史都市の社会史』 町田祐一

**反差別人権研究みえ 6** (反差別人権研究所みえ刊, 2007. 6)

説

**京都市歴史資料館紀要 26** (京都市歴史資料館刊, 2016. 2)

『京都市政史』全巻刊行記念シンポジウム—明治から平成へ—

『京都市政史編さん通信』所収論文総目次

寛文～元禄期における京都町奉行与力の編成 井上幸治

「伏見桃山城キャッスルランド旧蔵資料」目録

**京都地域研究 17** (京都地域研究会 立命館大学衣笠総合研究機構刊, 2003. 3)

特集 京都の多様な「生活世界」—共生社会構築に向けてのさまざまな取り組み—

京都市南区東九条のまちづくりとNP0の役割 宇野豊／新聞記事を通じてみた京都の在日朝鮮・韓国人像の変容—

1945～2000年の京都新聞の記事から— 江口信清／楽只

(千本) 地区コミュニティ活性化の取り組みと課題 熊谷亨／京都のホームレス問題と支援活動の現状 本田次男／資料 京都の社会地図—平成12年国勢調査小地区集計をもとに— 河原大

計をもとに— 河原大

**京都部落問題研究資料センター通信 42** (京都部落問題研究資料センター刊, 2016. 1)

報告 2015年度部落史連続講座2

100年前のモノグラフ—日雇労働者とオーラルヒストリー— 吉村智博

『土蜘蛛』劇評もどき 渡辺毅

収集逐次刊行物目次 (2015年10月～12月受入)

**グローブ 84** (世界人権問題研究センター刊, 2016. 1)

胞衣の取扱いをめぐって—明治20年代前半の京都を中心に— 白石正明京都市立小学校民族学級の歴史 松下佳弘

人権フォーラム「人権の世紀」の実現に向けて 矢野亮

**国際人権ひろば 125** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2016. 1) : 350円

特集 日韓のひとり親家族の今

**国際人権ひろば 126** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2016. 3) : 350円

特集 グローバルな視野からみるビジネスと人権

**コリアNGOセンターNews Letter 41** (コリアNGOセンター刊, 2015. 12)

「セミナー 京都・東九条と在日コリアン」報告

東九条「40番地」と在日コリアン 村木美都子／東九条マダンのとりくみとその意義 朴実／被差別部落と在日コリアン 前川修

前川修

**信州農村開発史研究所報 134** (信州農村開発史研究

所刊, 2015. 12)

佐藤治郎前村長・代表理事を悼む 重田喜行

明治六・七年の加増村部落の闘い—尾崎行也さんの研究から— 斎藤洋一

**人権と部落問題 881** (部落問題研究所刊, 2016. 2) : 600円

特集 アイヌ民族問題を考える

八次小事件が子どもたちの心に残したもの—あやまった同和行政、「解放教育」のいきつくところは— 岡田隆行

文芸の散歩道 杉田玄白『蘭学事始』の「老屠」「彼奴」

呼称 成澤榮壽

**人権と部落問題 882** (部落問題研究所刊, 2016. 2) : 1,100円

特集 憲法と戦争立法

人種差別撤廃施策推進法案の問題点 奥山峰夫

ヘイトスピーチ(差別扇動行為)問題について—全国人権連の立場から— 新井直樹

**人権と部落問題 883** (部落問題研究所刊, 2016. 3) : 600円

特集 「3.11」五年目の現実

金子欣哉さんありがとう 東上高志

文芸の散歩道 福本正夫生誕百年—ある短歌をめぐる疑問 秦重雄

**人権と部落問題 884** (部落問題研究所刊, 2016. 4) : 600円

特集 18歳選挙権と政治教育

文芸の散歩道 藤村における巣立ち—「春を待ちつゝ」— 川端俊英

部落問題研究所70年の面影 1 なぜ京都で 東上高志

**季刊人権問題 382** (兵庫人権問題研究所刊, 2016. 1) : 700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 19 全国から八鹿へ 3 八鹿高校事件から学んだこと(下) 小林軍治

**振興会通信 125** (同和教育振興会刊, 2015. 11)

「部落地名総鑑」発覚40年、「御同朋」の視座から考える 藤本信隆

同朋運動史の窓 31 左右田昌幸

**振興会通信 126** (同和教育振興会刊, 2016. 1)

同朋運動史の窓 32 左右田昌幸

**身同 35** (真宗大谷派解放運動推進本部編, 2015. 12) : 1,200円

特集 戦後70年—非戦・平等への誓い

セルビア&マケドニア ジブシー音楽修行記』

**解放新聞 2757** (解放新聞社刊, 2016. 4. 4) : 90円  
ぶらくを読む 101 偏見と差別は人を殺す—レイシズム  
とヘイトスピーチ 湧水野亮輔

**解放新聞愛知版 433** (部落解放同盟愛知県連合会刊, 2016. 2. 1) : 100円

故佐野政吉書記長を偲んで 座談会 波乱万丈の人生 む  
らの仕事づくりから運動もいっしょにやってきた

**解放新聞改進黨 473** (部落解放同盟改進黨支部刊, 2016. 1)

「部落地名総鑑」発覚から40年 2

**解放新聞改進黨 474** (部落解放同盟改進黨支部刊, 2016. 2)

「部落地名総鑑」発覚から40年 3

**解放新聞京都版 1045** (解放新聞社京都支局刊, 2016. 3. 1)

本の紹介 『部落史の先駆者 高橋貞樹 青春の光芒』

**解放新聞京都版 1048** (解放新聞社京都支局刊, 2016. 4. 1)

2016年度運動方針 (第1次案)

**解放新聞東京版 875・876** (解放新聞社東京支局刊, 2016. 1. 1・15) : 180円

江戸の町を賑わす芸能者たち 太田恭治

**解放新聞兵庫版 819** (解放新聞社兵庫支局刊, 2016. 3) : 50円

「ゆるいネットワーク」づくりが大切 結婚差別の現実に学ぶ

**解放新聞広島県版 2195** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 1. 15)

昭和史の中のある半生 37 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2196** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 1. 25)

経典の「旃陀羅」差別を問う 岡田英治

昭和史の中のある半生 38 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2197** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 2. 5)

経典の「旃陀羅」差別を問う 小森龍邦

昭和史の中のある半生 39 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2198** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 2. 15)

昭和史の中のある半生 40 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2200** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 3. 5)

昭和史の中のある半生 41 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2201** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 3. 15)

昭和史の中のある半生 42 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2202** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 3. 25)

昭和史の中のある半生 43 小森龍邦

**架橋 34** (鳥取市人権情報センター刊, 2016. 2)

特集 同和对策審議会答申50年を振り返り、今問われていることを確認する

同和对策審議会答申50年の意義と今問われていること  
村井茂/明日の湖南のために 山根範恵/実態調査の変遷に見る「同対審」答申の成果と課題 田川朋博

みんなの架橋〜架橋でめぐる全国の人権機関〜戦後70年と福山市人権平和資料館 田中淳雄

**語る・かたる・トーク 251** (横浜国際人権センター刊, 2016. 1) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 48 格差を乗り越えるための家庭学習 3—学習の自立をめざして 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 涙の『全員リレー』 吉成タダシ

**語る・かたる・トーク 252** (横浜国際人権センター刊, 2016. 2) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 49 格差を乗り越えるための家庭学習 4 家庭学習のための5W1H 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う ピンチはチャンス 吉成タダシ

**語る・かたる・トーク 253** (横浜国際人権センター刊, 2016. 3) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 50 格差を乗り越えるための家庭学習 5 第四のW、学習課題の設定 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 励ましの言葉 吉成タダシ

**かわとはきもの 174** (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2015. 12)

靴の歴史散歩 119 稲川實

近世アジアの皮革 5 日本の日用革製品 竹之内一昭

皮革関連統計資料

**京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信**

**16** (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2015. 12)

東九条の語り部たち 前川修

一人一人の人生から見えてくる歴史を大切にしたい 梁

# 収集逐次刊行物目次 (2016年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**IMADR通信 185** (反差別国際運動日本委員会刊, 2016. 3) : 500円

特集 国連が支持したマイノリティ女性の声～女性差別撤廃委員会日本審査を通して

**ウィングスきょうと 132** (京都市男女共同参画推進協会刊, 2016. 2)

図書情報室新刊案内

『王さまと王さま』(リンダ・ハーン, スターン・ナイランド文) / 『ジェンダーで学ぶ社会学』(伊藤公雄, 牟田和恵編)

**岡山部落解放研究所報 292号** (岡山部落解放研究所刊, 2016. 1) : 100円

楠山碑文再読 妹尾進治

**解放研究とっとり 研究紀要 18** (鳥取県人権文化センター刊, 2016. 3) : 500円

部落問題に関する言論と「被差別部落」の人たち～明治期の鳥取県を素材として～ 北尾泰志

同対審答申から解放運動を振り返る 中田幸雄

認知症の本人視点が拓く新時代～「クローバー」のこれまでと、これから～ 若年性認知症問題にとりくむ会・クローバー事務局

「地域で学ぶ人権学習」の現状と課題～市町村への聞き取り調査から～ 鳥取県人権文化センター

**解放新聞 2746** (解放新聞社刊, 2016. 1. 11) : 90円

本の紹介 鎌田慧著 『戦争はさせない』

今週の1冊 鈴木邦男×福島みずほ著 『戦争を通すな!』

人権ツアー熊本 全国部落史研究会

**解放新聞 2747** (解放新聞社刊, 2016. 1. 18) : 90円

ノンフィクションからの警鐘 14 下重暁子著『家族という病』 音谷健郎

ぶらくを読む 100 再び伝統芸能の始原へ 4 湧水野亮輔

**解放新聞 2748** (解放新聞社刊, 2016. 1. 25) : 90円

今週の1冊 『雇用身分社会』(森岡孝二著)

解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 1 最初に手をさしのべたのは

識字のノート 滋賀・和田識字教室

**解放新聞 2749** (解放新聞社刊, 2016. 2. 1) : 90円

ノンフィクションからの警鐘 15 岡田幹治著『ミツバチ大量死は警告する』 音谷健郎

今週の1冊 『幕末維新を動かした8人の外国人』(小島英記著)

解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 2 石川無実につながる原点示す

識字のノート 徳島・長岡東識字学級

**解放新聞 2750** (解放新聞社刊, 2016. 2. 8) : 90円

2016年度一般運動方針 (第1次草案)

**解放新聞 2753** (解放新聞社刊, 2016. 3. 7) : 90円

ノンフィクションからの警鐘 16 『「格差」の戦後史』 橋本健二著 音谷健郎

今週の1冊 斎藤貴男著 『ジャーナリストという仕事』

解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 3

**解放新聞 2755** (解放新聞社刊, 2016. 3. 21) : 90円

「全国部落調査 部落地名総鑑の原典復刻版」の発行・

販売にたいする抗議声明 部落解放同盟中央執行委員会

**解放新聞 2756** (解放新聞社刊, 2016. 3. 28) : 90円

今週の1冊 吉開裕子著『トランペットを吹き鳴らせ!』

## 事務局よりお知らせ

◇今年度より連続講座名を「部落史連続講座」から「差別の歴史を考える連続講座」へ、講座の内容に沿うように変更しました。年6回分の日程と内容が決まりました。是非ご予約にいらしていただき、ふるってご参加ください。

◇昨年度の部落史連続講座の講演録ができあがりました。ご希望の方はメール・FAXでご連絡ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryu.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分